

令和6年度 県立水戸第一高等学校自己評価表

目指す学校像	○真理を愛する学問第一の校風の下、質が高く、活気ある授業や課題研究、社会と連携した教育プログラムを展開し、生徒が切問近思の姿勢で学ぶ学校 ○自主自立の精神を重視する自由な校風の下、生徒が何ごとにも主体的に取り組むとともに、中高・学年の枠を超えて切磋琢磨する学校 ○至誠一貫・堅忍力行の校是の下、豊かな人間性や最後までやり抜く力を育むとともに、高い目標に挑む生徒をしっかりと支援する学校			
	三つの方針	具体的目標		
「三つの方針」 (スクール・ポリシー)	「育成を目指す資質・能力に関する方針」 (グラデュエーション・ポリシー)	社会の変化に対応するだけでなく社会に変革をもたらす、グローバルな視点をもって茨城から世界に羽ばたく、高い志をもって地域医療をはじめ地域課題の解決を先導する、といった形で社会に貢献できる者を育成する		
	「教育課程の編成及び実施に関する方針」 (カリキュラム・ポリシー)	難関大学や医学部医学科、海外大学への進学希望にも十分応える質の高い授業と学習支援・進路支援を展開するとともに、生徒が主体的に取り組む特別活動等を重視する		
	「入学者の受入れに関する方針」 (アドミッション・ポリシー)	○真理を愛する学問第一の校風を理解し、好奇心旺盛で、自ら定めた課題を深く探究しようという切問近思の姿勢のある生徒 ○自主自立の精神を重視する自由な校風を理解し、何ごとにも主体的に取り組み、多様な者と協働しようという意欲のある生徒 ○至誠一貫・堅忍力行の校是を理解し、人格を磨き、高い目標に向けて最後までやり抜こうとする気概のある生徒		
	昨年度の成果と課題	重点項目	重点目標	達成状況
【成果】 令和5年度(2023年度)の重点項目に関する8の重点目標の達成状況は、Aが3、Bが5、Cが0であり、十分目標を達成できたといえる。次年度についても、各項目の検証を重ね目標達成を実現していく。 進学状況については、国公立大学・準大学の現役合格者数が140名、既卒者を加えた総数は190名となった。難関大学(東北・東京・東京工業・一橋・名古屋・京都・大阪)については、現役34名、既卒17名が合格した。東京大学は現役6名、既卒5名で、11名合格した。また、医学部医学科合格者には、国公立大学・準大学で現役14名の合格者を出した。これは記録が残っている限り、本校で過去最多である。既卒も6名合格し、計20名の合格者となった。私立大学も現役3名、既卒14名と健闘した。理系人気が高まる中で、特に理数系教科の学力増強が課題である。 特別活動については、コロナによって途切れてしまったものを復活させるべく、新しい発想と工夫によって生徒が主体的に活発な活動ができた。また、生徒会活動では附属中学校が完成年度を迎え、中高連携した活動もできた。部活動でも中高が連携した充実した活動ができた。		教育課程・学習支援の改善・充実	①新課程での大学入試への対応を進めるとともに、中高連携・教科横断で授業改善を図り、生徒の授業満足度90%以上を目指す。	A
			②DXハイスクールの採択を踏まえ、教育・学習活動等におけるICTの有効活用を進める。	B
			③科学オリンピックをはじめ、他校生等と切磋琢磨する「他流試合」への参加を奨励し、活躍を支援する。	A
		進路支援の改善・充実	④難関大学(東大・京大・阪大・東北大・名大・東工大・一橋大)や医学部医学科をはじめ、生徒及び既卒生の第一志望実現を支援する。	A
		中高・学年の枠を超えた活動の推進	⑤+4学年活動など、附属中との中高連携での活動や特別活動の改善・充実を図るとともに、部活動改革を推進する。	A
		健康・安全の確保と法令遵守の徹底	⑥最後までやり抜く力の育成や教育相談環境の整備を図るなど、生徒の心身の健康・安全を確保する。	A
			⑦業務改善を進め、職員の心身の健康・安全を確保するとともに、法令遵守を徹底し、違反件数ゼロを目指す。	A
【課題】 ①科学技術系コンテストでの実績を上げるため、全校体制で科学探究指導を強化するシステムを構築する。 ②本校での学びを一層効果的に深めるため、授業改善推進チームを中心に引き続き教員研修の機会を設ける。 ③難関大学及び医学部医学科への進学実績は、特に医学部医学科では大きな成果を上げたと言える。詳細な生徒把握と丁寧な進路支援がその主要因であると分析しており、引き続きそのノウハウの校内共有を進める。				

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題		
国語	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	A	○生徒の活動の形態や主体性を育む指導について更に研究する。	
	各科共通	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。		A	○生徒の集中力が高まる時間が増えるように、授業内での構成や内容を工夫していく。 ○場面・目的に適したICT機器の活用法を研究していく。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。		B	○研修の機会を更に設ける。
		国語の学習に対する意欲・関心を高める。	○授業方法を工夫改善し、教員相互に授業を公開するなど、教科内における研修等を行い、指導方法に対する研究を深める。 ○指導内容・方法・進捗について、各学年の担当者間で綿密に連絡する。 ○中高の連携を強化し、交流を通して相互の学びの意欲を高める。	A	○今年度も実施したが、同学年担当のみならず異なる学年間、中高にまたがっての相互の授業観察、意見交換などを活発にし、次年度以降を見据えたよりよい授業計画をたてられるように努めていく。	
		基礎学力の定着を図り、段階的に難関大学入学試験に対応できる学力の養成を図る。	○小テスト等によって基礎学力の定着を図る。 ○新学習指導要領・大学入学共通テストに対応するための学習指導の在り方について研究を深める。 ○個別の添削指導を実施するなど、難関大学入試に対応できる文章読解力・表現力の養成を図る。 ○副教材・ICT機器を利用するなどによって、学習内容の深化を図る。 ○定期考査等基本・発展を取り混ぜた設問構成を工夫し、平均点50～60点台の問題を実施する。	A	○小テストや単元テスト等のあり方について、実施状況や結果の分析を行い、情報交換を密にして研究を深める。 ○今年度の結果を分析して情報共有を図り、よりよい時期に適切な支援ができるよう努めていく。 ○ICT機器の使い方としてより適切な場面、内容を探していく。 ○考査実施後の結果の分析だけでなく、事前の伝え方との関係性も意識しながら範囲、内容について考えていく。	
		自立的な学習を促し、豊かな言語能力を持った生徒を育成する。	○生徒の実態に即した課題の提示などにより生徒が自主的に学ぶ姿勢を育み、自立的学習の習慣を獲得させる。 ○読書意欲や創作意欲を喚起し、各種コンクールへの取り組みを奨励する。	B	○与えた課題に対しての生徒の取り組み状況を把握し、生徒が自主的に学べるような支援のあり方を考えていく。 ○読書意欲を喚起するための授業内の取り組みについて研究を深める。	
地歴公民	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B	○生徒の興味関心が高まるよう、大学での学問分野との関連を意識しながら、学問自体が持つ魅力を伝えられるような授業を展開する。また、生徒同士の話し合いをさせたり、発問を工夫するなど対話的な活動もとりいれる。これらを次年度以降も継続して生徒の学習意欲を喚起する授業を進めていきたい。	
	各科共通	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。		B	○新課程の共通テストが実施されたことを受けて、年間計画や授業展開についての再検討する。 ○電子黒板を利用した授業は定着しているが、電子黒板のみならずタブレットをどのような場面で活用するのが有効かを継続して検討していく。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	○教科内での授業参観や、教員向けの校内研修の機会を活用して指導方法の向上に努める。 ○他校での実践発表や各種研修・セミナーにも参加し、指導方法の向上に努める。	
		綿密な教材研究や授業改善を図るとともに、大学入試問題の研究を継続的に行い、進路実現のための確かな学力を養成する。	○教員相互間での研修により専門性を高め、生徒の知的好奇心を喚起する授業の実施を目指す。 ○基礎・基本を徹底させるとともに、自ら思考する能力、資料を分析する能力、課題に取り組んでいく姿勢等を身につけさせる。 ○国公立大個別試験、難関私立大学試験、共通テスト等の分析を綿密に行い、授業、定期考査、校内模試等へ反映させることにより生徒の学力向上を図る。	A	○生徒の添削指導なども教員間で共有し、より質の高い授業や個別指導を実施していく。 ○より高度な内容を学びたい生徒から、基礎・基本の振り返りの学習を必要とする生徒まで、多様な生徒の学習ニーズに応えられるような授業づくり・教材づくりに励む。 ○新課程の共通テストを中心としながら、入試動向の分析や研究に努め、教員間で情報の共有をはかる。教員間で検討することを通して、教員の力量を高めると同時に、生徒の力を伸ばしていく。	
	教科研修の充実によって、教員の授業力の向上をはかるとともに、新学習指導要領、中高一貫教育、評価方法の研究を進める。	○科目担当者間での授業の進度、指導方法など綿密な打合せを行い、課題意識を共有し、指導を充実させる。 ○ICT機器やソフトウェアの活用方法に対する研究を継続的に実施していく。 ○新学習指導要領、中高一貫教育に対する研究を継続的に実施していく。 ○生徒の学習活動・能力を的確に評価する方法の研究を実施していく。	B	○今後も教員個人のみならず、教員間でも研鑽を積み、より高い質の授業が展開できるように改善を継続する。		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
数学	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	A ○入試情報に振り回されない確かな学力像を生徒自らが持てるように働きかける。 ○経験豊かな教員の数学教育の知見を吸収し、次世代にデジタル化して残していく。 ○すべてをICTを扱うのではなく、適切な分野やタイミングを見極め、教育効果を高めていきたい。 ○教育課程変更後の入試に向けた力を生徒がつけることができるように、進度や指導内容の情報を共有する。
		充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	A	
		○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
	授業に積極的に取り組ませるとともに、自主的に数学に取り組む態度を育成する。	○低学年では予習復習を励行させ、教科書内容を定着させ、入試に必要な基礎力の定着を図る。 ○学年の進行とともに課題の在り方を検討し、低学年では課題等の提出を習慣化させ、高学年では自主的学習に移行できるように促す。 ○学年担当者間の連携を密にし、教材の精選と授業内容の充実に努めるとともに、多様な見方・考え方を例示するなどして、数学に対する生徒の興味・関心を高める。 ○電子黒板などICT機器の実践事例やノウハウを蓄積し、職員間で共有し実践することで生徒の授業理解の深化を図る。	B	B ○新課程になり、学習内容が増えたことにより授業進度や教授内容について、十分に検討する必要がある。そのために、教材の精選やICT機器を活用し、必要な基礎力を定着できるようにしていきたい。
進路実現のための学力向上を図る。	○考査・試験・課題の問題は学年全体で精選検討を重ねるとともに、結果についても分析を行い、継続的な指導に活かす。 ○大学入試問題等を日頃から研究し、積極的に授業に取り入れ、大学個別入試および共通テストに対応できる力をつけさせる。 ○大学入試問題分析会(有名難関大学)を実施し、入試問題研究や教材研究により教員のレベルアップを図る。	B	B ○今年度初めての新課程での入試になり、外部の講演会も含めて情報収集し、教員間で共有していきたい。生徒に対しては、新課程入試の結果の分析を踏まえ、実力試験、定期考査や章末テストでの問題を精選することで学習効率向上を狙って還元していく。	
理科	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B ○生徒の主体的な取り組みを高めるような指導法・教材・教具の工夫をしてきたが、次年度も教科内で議論を重ねるなどしてより一層努力していきたい。内進生の指導については、中学と高校間の連携をより深め、生徒の学力を把握した上で、授業の進度や発展的な内容の取扱い方などについて、今後さらに改善していく必要がある。 ○次年度も、ICT機器を効果的に活用し、授業の効率化と充実に努めていきたい。 ○次年度も、教科内で授業参観を行うなどして、指導方法について活発な意見交換をしていきたい。また、他教科の授業参観にも積極的に参加し、自己研鑽に励みたい。
		充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	B	
		○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
知的な好奇心を育て、科学的な思考力・判断力・表現力が身につくよう、教員の授業力の向上を図り、授業展開を工夫する。	○自然科学の様々な事象現象について深く考察し、科学的な思考力・判断力・表現力を身に付けられるように、観察・実験において主体的・対話的な学びの授業展開を工夫し、実践する。 ○重要な図やデータの考察・理解にデジタル教材を活用し、知識の習得と整理がしやすくなるようにする。 ○最先端の科学技術について、授業内で適宜話題に出し、生徒に興味・関心を持たせられるようにする。	B	B ○生徒が科学的な思考力・判断力・表現力が身に付けられるように、演示実験や生徒実験をより多く取り入れた授業を行ってきたい。また、普段の授業においても、対話的な学習の場を授業の中に設けるなど、生徒が主体的に取り組める工夫を凝らしていきたい。 ○デジタル教材の活用についても、さらなる工夫を進め、生徒の興味、関心を高めていきたい。	
確かな学力の定着を図ると共に、生徒それぞれの進路希望に応じた入試に対応できる学力の養成を図る。	○基本的な原理・法則の理解を深め、さらに問題演習を重ねることで学力の定着を図るために演習量を確保する。また、校内試験ごとに解答の見直しをさせ、基礎学力および応用力の向上を図る。 ○国公立大学個別試験、難関私立大学試験の分析、また、大学入学共通テストに対応できるよう担当教員間での報告・連絡・相談を密に行い、授業や定期考査等に反映させることで学力の向上を図る。	B	B ○定期考査では、基礎・基本の定着を図り、実力試験や校内模試では、難易度の高い問題を出題し、応用力を身に付けさせることができた。今後も、大学入試の動向を踏まえ、共通テストや二次試験の詳細な分析を各教科で行い、高い学力の育成に努めていきたい。	
新学習指導要領や大学入学共通テストに向け、研修の確保・充実に努め、教員の授業力向上・これからの時代に求められる教育のよりよい在り方に対する意識の向上を図る。	○新学習指導要領・大学入学共通テストに対応するための学習指導の在り方や校内模試の在り方など、これからの本校の理科教育の在り方について検討を進めていく。 ○主体的な学びや対話的な学びの過程で、ICTを効果的に活用する。 ○ICTの活用などに際しては、教員間での教材の共有化を図るなど研修の機会を設け、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B	B ○今後も教科内で意見交換をしながら、より良い学習指導法や観点別評価の仕方について検討し、改善していきたい。 ○ICTの活用方法に関しても、研究授業などを通して活用方法を研究し、より効果的な活用方法を検討していきたい。	
各種科学オリンピックにおける生徒の上位入賞を図る。	○各種科学オリンピックへの参加生徒を募り、上位入賞が実現できるよう指導の機会を設ける。	B	B ○各種科学オリンピック・コンテストに挑戦する生徒の数を増やすと共に、全国大会出場、上位入賞の実現に向け、より良い指導法を構築していきたい。	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B ○生徒の主体的で深い学びにつなげるために各授業を通じて、生徒が互いに教え合うこと学び合うことを促進したい。また、進路実現に向けて健康安全面からも積極的にアプローチしたい。 ○指導内容を段階的、系統的に体系化を図り、生徒の伸長に寄与したい。 ○体育館のWi-Fi環境が整備されたことから、体育実技各種目においても積極的に活用を図りたい。 ○各種研修会への参加や教科会を通じてより良い授業実施のため、ノウハウの共有、指導方法の改善を図り、生徒の主体的活動参加への契機としたい。
	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B	
		○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
	歩く会の高い完歩率を維持させる。	○集団行動における規律と態度を学ばせ、有意義な学校生活を送らせる。 ○体力の向上のために計画的な授業を構築し、完歩への意欲を喚起する。	A	
保健体育	体力テストの底上げを図る。	○本校生は筋力全般が弱いので、体育授業で毎時補強運動を実践する。 ○長距離走への積極的な取り組みにより、基礎体力及び全身持久力の向上を図る。 ○体力テストにおける本校生の弱い部分(投力)の強化向上を図る。 ○特別活動の体育分野における積極的活動を推進する。	A	A ○伝統行事の「歩く会」の意義を理解させるとともに、9月の練習における暑さ対策、健康への配慮を第一に考えながらも体力の維持・向上を図っていききたい。 ○体育科以外教員の協力体制のさらなる構築。 ○基礎体力の養成が体力の向上につながり、ひいては生涯全てのライフステージにおける心身の健康、豊かなスポーツライフの実践に繋がる点を理解させ、生徒への指導にあたっていききたい。 ○基本的な運動スキルの獲得と安全面への配慮を念頭に、授業に取り組むようにする。基本的な運動スキルは運動技能を高めるだけでなく、怪我の防止にもつながり、安全面への配慮は事故の未然防止につながる点をふまえながら指導に努めたい。引き続き、感染症防止対策及び熱中症防止対策にも積極的に取り組んでいく。 ○「保健」の授業では、各自の健康課題を理解させ、生活実践に活かす指導を行いたい。そのためには、グローバルな視点にも立ちながら各自の健康課題を積極的にとらえる指導に取り組んでいきたい。 ○ICTの効果的な活用方法についての研修を行い、実践に向けて準備する。 ○資料及び各種データの共有システムの構築を行う。
	授業時のケガ等の防止に努める。	○運動の基本動作において、基本となる正しい動き方を身に付けることがスキルの向上のみならずケガの防止に繋がることが理解、実践させる。 ○用器具の取り扱い及び使用について安全第一を心がけ指導する。 ○授業に臨むに当たり、健康観察、感染症対策、熱中症対策、交通安全・交通事故防止に努めると同時に、生徒にも健康安全に対する自意識の向上を喚起する。	A	
	「保健」とおとして心身の健康の保持増進を図る。	○「保健」を通して、現代の健康問題や新しい時代の健康の考え方などについて理解させる。 ○「保健」の授業を通し、思春期から中高年期までに出あうさまざまな健康問題について学ぶとともに、労働や健康との関係や、働く人々の健康が保持増進されるしくみ、私たち一人ひとりが環境づくりに積極的に参加する意義やその方法について理解させる。 ○ICT機器の積極的活用を図り、生徒の興味関心を高め、生徒の情報活用能力を養う。	B	
	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	
各科共通	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	A A B	A ○芸術分野の進路を選択する生徒は多くないが、各生徒が生涯を通じて芸術に関心を持てるような指導をしていきたい。 ○各科目の特性に合わせてさらに効果的なICT活用を目指す。 ○実技指導に際しては個々の能力の差も生じるため、生徒ひとりひとりに合ったICT機器の利用法を模索したい。 ○表現と鑑賞を同じ時間内で進めたり、ひとつの題材で表現と鑑賞を関連づけるなど教材研究の際に考慮していききたい。
	鑑賞の機会を確保するよう努める。感性を高め、人生を豊かにするという意識・態度を育てる。	○授業の中や校内での鑑賞活動により多くの作品に接する機会を増やし、本物だけが持つ魅力を体感させ、豊かな感受性と人間性を身につけさせる。 ○様々な作風・ジャンルの作品を取り上げ鑑賞する事により芸術に対する視野を広めるとともに、ものを見つめる目を養い、個性を活かした芸術活動を目指させる。	B	
	自発的に、課題に取り組む姿勢を持たせる。	○実技・実習の時間をできるだけ確保するとともに、その内容を精選し、工夫して実践できるようにする。基礎から応用までバランスの取れた授業内容を目指す。 ○生徒が主体的に取り組む学習活動を取り入れ、より活性化した授業展開を目指す。 ○個々の表現やグループでの表現を発表する機会を増やし、それを生徒同士で共有し理解し合う場面を多く設ける。	A	
芸術	新たな教材研究に努める。	○多様化している趣向に対応するための教材研究に努めるとともに、教師自身が技術向上の研鑽を積み、高いレベルでの指導ができるよう努める。	A	B ○校外学習による鑑賞活動を再開させ、生徒が本物の芸術に触れる機会を増やしたい。 ○多様なジャンルの作品を取り上げ広い視点で芸術を捉え、生徒の個性を大切にしながらその感性を高め芸術を重んじる精神を養いたい。 ○コロナ禍による実技の制限がなくなり元来の指導内容に戻すことができている。次年度からも生徒ひとりひとりがその個性を活かしながら自発的に活動する場を増やしていきたい。 ○個々の活動に加えグループやクラス全体での発表の機会をさらに増やし、作品や表現について他者と思いを共有できるようにしたい。 ○趣向が多様化している生徒に対応できるよう教師側の知見も広げていきたい。芸術に関し常に敏感であるよう心がけたい。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B ○授業アンケートの結果を指導に反映させさらなる改善を図る。 ○新教育課程下での大学入試に向けて、指導と評価の一体化や観点別評価、ICTを活用した授業について、教員間での連携を密にする。 ○教員間での情報交換や相互授業参観を積極的に行う。
	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果をも高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B B	
	1年 4技能5領域の統合的な言語活動を通して、総合的な英語力の伸長を図り、実践的コミュニケーション能力の基礎を育成する。	○英語コミュニケーションⅠでは、受容技能と発信技能のバランスのとれた指導を行い、英文を正しく理解したり、自分の意見や考えを表現したりする能力の基礎を養成する。 ○論理表現Ⅰでは、目的・場面・状況を意識しながら表現を学び、自己表現活動でそれを活用することや添削指導を通して、適切に自己表現するための知識・技能や表現力の基礎を育成する。 ○家庭学習では、サイドリーダーや総合問題集等を授業の内容や評価と有機的に関連づけることにより、自律した英語学習者としての態度を涵養すると同時に、英語力のさらなる伸長を図る。 ○観点別評価において、評価の場面と評価の対象を生徒と共有すること、各試験の問題の改良を図ること、実技試験で即興性のあるやり取りの評価を行うことを通して、信頼性と妥当性のある評価を行い、指導と評価の改善を目指す。 ○外部検定試験において、CEFRA2(実用英語技能検定準2級相当)の生徒100%(243名)、CEFRB1(同2級相当)の生徒70%(約170名)を目指す。	B	
外国語	2年 4技能5領域の統合的な言語活動を通して、総合的な英語力の伸長を図り、実践的コミュニケーション能力を育成する。	○英語コミュニケーションⅡ:教科書をベースに、受容技能と発信技能のバランスのとれた指導を行い、英文を正しく理解したり、自分の意見や考えを表現したりする能力を養成する。将来の大学入試にも対応できるように、教科書の内容をもとに発展的な学習も行う。 ○論理表現Ⅱ:目的・場面・状況を意識しながら既習事項の反復と新出表現を学び、論理的なスピーキングやライティングを習得できるように、適宜ALTと協力して授業を実施し、さらにサブテキストを利用して、大学入試レベルで論理的に読んだり書いたりできるように演習する。 ○サイドリーダーや総合問題集等の自主学習課題を、授業の内容と関連づけることによって、自律した学習者としての態度を涵養すると同時に、理解力および表現力のさらなる伸長を図る。 ○定期考査や実力試験、パフォーマンス評価を通して、学習の動機付けに資するような指導と評価の一体化を目指す。 ○CEFRB1(実用英語技能検定2級相当)、CEFRB2(同準1級相当)の生徒がさらに増えるように、ALTと協力して普段の授業の中で対策をする。	B B	B ○英語コミュニケーションⅡ:教科書をベースに基礎力の充実を図った。また、副教材を利用して入試にも対応できる発展的な学習も行った。 ○論理表現Ⅱ:ALTの協力により、スピーキング力やライティング力の向上を図った。また、副教材を利用して入試レベルの英作文演習を実施した。 ○自主学習課題を、授業の内容と関連づけることによって、自律した学習者としての態度を涵養し、理解力や表現力のさらなる伸長を図った。 ○各種の試験を通して、学習の動機付けに資するような指導と評価の一体化を図った。 ○CEFRB1(実用英語技能検定2級相当)、CEFRB2(同準1級相当)の生徒がさらに増えた。 ○次年度は生徒の進路実現のため、大学入試対策の充実を目指したい。
	3年 4技能5領域の統合的な言語活動を通して、総合的な英語力の伸長を図り、大学入試にも対応できる実践的コミュニケーション能力を育成する。	○英語コミュニケーションⅢ:受容技能と発信技能のバランスのとれた指導を行い、迅速かつ正確に英文を理解したり、自分の意見や考えを適切な表現で伝えたりする能力を養成する。 ○論理表現Ⅲ:目的・場面・状況を意識したライティングやスピーキングの活動、英作文の添削指導を通して、適切に自己表現するための知識や表現力を育成する。 ○長文読解問題集等の自主学習課題を授業の内容や評価と有機的に関連づけることにより、自律した学習者としての態度を涵養すると同時に、理解力および表現力のさらなる伸長を図る。 ○定期考査・校内模擬試験問題の改良やパフォーマンステストなどを通して、明示的で且つ教科パフォーマンスと相関性の高い評価を行い、学習の動機付けとする。 ○CEFR B2(英検準1級相当)の生徒20%(約45名)、CEFR B1(同2級相当)の生徒100%(236名)を目指す。	B	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
家庭	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	○将来に向け一人ひとりが主体的に取り組めるように、用具の整備や2展開の授業を実施した。次年度は中高の授業計画を見直し、実習室の使用方法等の両立を確立していきたい。
	各科共通 充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B	
		○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	A	○生徒の実態や社会全体の傾向い合わせた「主体的・対話的で深い学び」を育成するための授業展開を構築していきたい。
	基礎・基本の内容を体験を通して理解させ、問題を見つけ、よりよい生活に変えていこうとする態度と生きる力を育てる。	○実験・実習内容を工夫と精選をし、知識と体験の定着を図る。 ○各分野における変化や問題を自分事として捉えられるように、高校卒業後の自分の人生に反映していこうとする態度が身につく授業の展開を図り、自ら学び自ら考える力を育てる。	B	B ○今年度は、赤ちゃん触れ合い体験など、昨年度よりも実習に費やす時間を確保することができた。次年度以降も実施計画を見直し続け、生徒一人ひとりの生活力の向上に繋がるよう努めたい。
	各分野の関連性・重要性を見だし、日常生活と比較させることで、主体的・総合的に生きようとする意識・態度を育てる。	○夏休みに各家庭で実施するホームプロジェクトでは、4月からの授業の中で全員が計画的に進めていけるように支援し、日常生活の中の問題点・改善点を認識させ、生活の質の向上に結びつくように工夫する。	A	
情報	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B ○情報分野に興味のある生徒とそうでない生徒の格差を感じている。情報社会の一員として生きる生徒達にさらなる意識の高揚を図ってほしい。 ○授業はスライド等を用いておこない、分かりやすさを心掛けた。また、授業で使ったスライドは生徒達と共有し、生徒が復習や自主学習に活用できるようにした。 ○授業内容は精選し、効率的・効果的な内容にしていきたい。 ○引き続き、研修等で研鑽を積んでいきたい。
	各科共通 充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A	
		○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図る研鑽を積む。	B	
	学習活動を通じて、情報モラルに対する知識・理解を深め、状況に応じた適切な行動ができるようにする。	○授業等において多様な手段(動画視聴や事例検討)を用いて生徒が「自分事」として捉えられるようにさせ、情報モラルが着実に定着するよう指導する。	B	B ○情報モラルについては、重要な指導事項として、今後も継続して効果的な実践をしていきたい。 ○授業の中で、共通テスト(試行問題)の問題を考えさせた。単に、用語を覚えるだけでは足りないことを実感してもらった。さらに機会を増やしていきたい。 ○2学年生徒に対しては、オンライン教材(ドリル)の提供、実力テストや模擬試験の実施をおこなったが、生徒によって意識の差は大きく、さらにどのような働きかけをしていくのが課題である。 ○「情報関係基礎」については、過去25年分の分析を順次行っており、教科の特性上、内容が古いものや、現在の出題形式とは異なる物も多いので、現在の形に合うように再構成を今後も継続して実施する。 ○オンライン教材の活用は定着してきたが、内容について工夫が必要である。
	共通テスト新規実施科目として、最新の情報収集に努めるとともに、生徒がそれぞれの希望進路に応じた学力を身に付けられるよう指導する。	○共通テストに関する最新情報の収集をに努め、3学年生徒が安心して受験に臨めるように支援する。 ○情報科関連の授業がない「空白の1年」にある2学年生徒に対し、次年度へ向けた効果的な学習支援を実施する。 ○「基本情報処理検定」や、センター試験や共通テストで出題された「情報関係基礎」の問題分析をおこない、生徒に還元する。 ○新学習指導要領のねらいに基づき、授業の中で生徒が主体的、対話的で深い学びができるようなワーク(作業)を取り入れる等工夫をおこなう。 ○クラウドの活用や、オンライン教材を用いて、生徒がその習熟度に応じた学習ができるよう に努める。	B	
生徒が情報科で学んだことを、日常生活の中で積極的に生かし、情報社会に主体的に参画できるようにする。	○Google Workspace for Education の活用など、情報科で身に付けた内容を生徒が他教科や特別活動において効果的に活用できるよう支援する。	B		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
教務	授業時間を確保する。	○自習をできるだけ避けるため、早めに出張・年休を把握し、可能な限り授業交換をする。その際、交換による授業の不均衡にも配慮する。さらに、授業の曜日変更により、定期考査間の授業時数の均一化をはかる。また、夏季課外を円滑に実施する。	B	○授業や行事が事前の計画通りに実施できるよう、各部署に働きかけていく。急な計画変更の場合にも適切に対処し、授業時間数の均一化が図れるよう、普段から連絡調整を密に行っておく。
	授業内容のさらなる充実を図るとともに、併せてICTの活用を推進する。	○60分6時間の授業をより充実したものとするため、教育改革部と協力し、教員相互による授業研究などを実施する。また、ICTを活用した授業展開を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B	○教育改革部と連携しながら、授業で効果的にICTを活用できる環境を継続して整えていく。また、遠隔授業をICTを活用して滞りなく実施できるよう努めていく。
	現行の教育課程の検討をする。	○学習指導要領に基づいて、単位制を活用した、より教育効果の高いカリキュラムの構築を目指すとともに、大学入試制度の変更を踏まえて教育課程の検討を行う。また、各教科・分掌と連絡を取りながら中高一貫教育校や医学コースの教育活動に沿った教育課程を検討する。	B	○現行の教育課程で3年間が経過し、各学年での学習指導を振り返り検証することが必要である。指導計画を見直ししながら、現行の教育課程に沿ったより良いカリキュラムとなるよう検討を続けていく。
	教育活動を公表する。	○学校説明会委員会や教育改革部と連携して、中学生対象の水戸一高説明会の実施により、本校の教育活動を公開する。また、同時に、学校公開やホームページを通して、地域住民等に広く水戸一高の教育理念を周知する。	A	B ○学校説明会も学校公開も、たくさんの来場者を迎えられる。特に学校公開では学校関係者や保護者のみならず、一般の方々にも多く来場していただいた。また、学校視察も多く受け入れ、本校の教育活動を十分に公開することができた。教育改革部と連携を取りながら、さらによりよいものにしていくよう計画していきたい。
	統合システムを円滑に運用する。	○校務支援システムの円滑な運用を進めるために、随時、管理体制の見直しや、活用法の研究に努める。また、システムの効率的運用で教員の授業研究時間の増加を見込む。	B	
	学校行事を各分掌、該当学年と連携して円滑に実施する。	○入学式・卒業式を、関係する学年や各分掌と連携、協力して円滑に実施していく。 ○各行事の企画・運営にICTの有効活用を図る。	B	○卒業式の時期が変更になったことで、他の学校行事や各学年への影響について、より綿密な連携が必要である。
	奨学会関係の事業を、各分掌や各学年と連携して円滑に進める。また、同窓会との関係を深め、諸事業に協力する。	○奨学会との連携・連絡を適切に行い、奨学会総会並びに奨学会役員会の企画・運営を、各分掌や各学年と協力して円滑に進める。 ○保護者や学年への連絡・報告を適切に行い、様々な学校行事が円滑に進められるように内容を工夫・改善する。 ○同窓会との連携・連絡を適切に行い、諸事業に協力していく。 ○高等学校PTA連合会関連行事を用いて、本校教育活動の発信に努めていく。 ○学校内外の状況変化に対応した各行事の企画・運営について研究を進める。	B	○時代の変化や、本校を取り巻く教育環境の変化に伴い、総会や役員会を通して、これからの奨学会の本校教育への助成のあり方を協議していく必要があると思われる。 ○同窓会とは、これからも連絡を密に取りながら、協力を依頼し、各行事の一層の充実を図りたい。
	奨学金関係事務を適正に実施する。	○奨学金関係の事務および奨学生の選考に関する事項等を、ICTも活用しながら適切に行う。	B	○保護者の目にお知らせが確実に届くような工夫を検討していきたい。
特別活動	学校行事を通じて、本校生としての一体感と誇りを持たせ、学校生活を充実させる。	○各委員会生徒と密接な連携を図り、明確な活動計画の基で各行事の運営を行う。 ○天候やその他の理由により計画通りにいかない場合に、適切な判断ができるよう、あらゆる事態を想定しリスクに備えるとともに、柔軟な生徒へのケアをおこなえるよう準備しておく。また、天候に左右されない計画を考えることにより、学習時間とのバランスをとる。 ○積極的な生徒会活動への参加を促し、主体的な運営ができるよう指導する。その活動の中で、集団を率いることのできるリーダーを育成する。 ○学習活動や他の諸活動とのバランスをとり、学校行事の満足度85%以上を目指す。	B	○今年度も生徒が主体的に行事を担うことができた。コロナ禍の影響で企画・立案・運営が継承されていない部分もあるが、新たに創り上げた部分もあった。次年度も生徒主体の行事運営ができるように、各委員会生徒と連携を深め、計画的に行っていく。 ○天候に左右される行事(クラスマッチ等)の企画・運営を見直し、かつ生徒・教員の負担軽減を図っていく。一部の生徒に負担が偏っていたため、当該学年とも連携しつつ、多くの生徒が関わられるように促す。
	部活動を通じて、豊かな感性と健全な心身を育む。	○部活動と学習活動を両立している生徒の割合、80%以上を目指す。 ○各部活動で主体的な運営になるよう導き、リーダーとなる人材を育成する。 ○各団体の設備、備品の管理を徹底させる。 ○附属中学生の体験活動を通じて、中高連携した活発な部活動を展開する。 ○限られた時間の中で、最大の効果が得られるよう計画性をもった活動になるよう指導する。	A	○部活動と学習活動を両立している生徒は76.6%で目標を達成することができなかった。特に1年生の数値が低く、入学後のフォローが必要である。 ○部活動指導方針を遵守し、適切な活動時間のなかで最大限の効果をあげられるように、各団体に周知していくとともに、生徒との意思疎通を図る。 ○部活動のさらなる活性化を図るために、中高連携のあり方を改善していく。
	HRにおいてキャリア・パスポートを活用する	○各学年のHRにおいてキャリア・パスポートを作成し、社会の中での自身の在り方を考える。	B	○引き続きキャリアパスポートの有効的な活用方法を研究していく必要がある。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
進路支援	<p>生徒一人ひとりが高い進路目標を持つことを推奨し、一人でも多くの生徒が進路実現できるように支援する。難関大学(東北大、東京大、東京工業大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大)の一般選抜(前期日程まで)において35名以上、医学部医学科において15名以上の現役合格を目指す。</p>	<p>○1・2学年と連携し、生徒の進路意識の高揚を図るとともに、授業を中心とした主体的かつ計画的な学習を促進させる。 ○生徒が大学のオープンキャンパス(WEB開催を含む)に明確な目的意識のもとで積極的に参加し、得たい情報を自らすすんで獲得しその活用がはかれるよう、学年との連携のもとで事前・事後の支援を強化するなど、その支援の仕方の工夫に努める。 ○東大をはじめとする難関大の研究を通じて、「難関大研究会」の機能をさらに強化し、学年間の情報共有に努め、進路希望の実現に結びつける。 ○大学入学共通テストに関して、学年や教科と連携し、定期考査等での出題の工夫をはじめとして新傾向の問題へ十全な対応を進める。 ○医学コース関連のプログラムを円滑に実施し、キャリア教育と学力増進の両面で医学科を志望する生徒への支援の充実を図る。</p>	B	<p>○進路意識の高揚については、1・2学年団による積極的な生徒への働きかけが年間を通じて計画的に実施され、十分にその目標を達成できた。また、オープンキャンパスについては、2学年を中心に丁寧な支援をしつつ、夏季休業中に多くの生徒が参加した。次年度についても、個に応じたより効果的な支援の工夫が必要である。 ○予備校等から集めた難関大に関する各種の分析データを学年に提供し、学年では生徒の状況と照らしながら東大研究会を中心とする難関大研究会等が、各学年各々の問題意識を反映した形で、新たな取り組みも交えて効果的に実施された。 ○大学入学共通テストについては、教科において対応が進んでいるものの、今年度の問題についてもしっかりと分析した上で、個別試験への対応を柱としつつ、しっかりと調整を図っていく必要がある。 ○医学コースの事業については、予定通り効果的に行うことができた。次年度もより効果的かつ効率的な支援を工夫していきたい。 ○KPI数値目標の達成度については、3月の結果を待つ。</p>
	<p>学年と連携をし、生徒や保護者に講演会やガイダンスを通して、進路情報を提供する。</p>	<p>○学年と連携し、進路講演会やガイダンスを通して、情報提供と生徒の啓発に努める。保護者に対しては、保護者対象の進路講演会や医学部進路講演会等も実施し進路情報の提供に努める。 ○生徒・保護者・教員の3者にとってより有益なものとなるよう「進学資料」、「進路の手引き」の改良に努める。</p>	A	<p>○学年との連携のもとで生徒対象の進路講演会を、それぞれ目的に応じて実施した。1・2学年については別個に保護者対象の進路講演会も実施し、多くの保護者が参加し、変わりゆく入試制度のその方向性や現状について、最新の情報を提供することができた。 ○1・2年生の医学部志望生徒の保護者を対象として、「保護者向け医学部講演会」も実施し、医学部入試の現状や医学部の実態等についても伝えることができた。</p>
	<p>生徒のデータを3年間通して見渡せる進路情報システムの改良と、その活用への環境整備を進める。</p>	<p>○3年間の学習成績と最終的な大学の合否がリンクした形でのデータベース「佐々木システム」について、今年度も新たにデータの更新を行い、職員研修等を実施し、進路支援における有効活用をはかる。またこのデータベースを活用して支援に有効と思われる出力形態についても研究を進め、活用の幅を広げていく。 ○現役時はもちろんのこと浪人した生徒も含めて、進路確定まで継続的な支援を行う。</p>	B	<p>○第3回校内模試や1・2年次の実力テストの成績と、現役時及び浪人時の大学の合否が、大学、学部、学科別等で検索できるシステムが3年前に完成し、今年度はその活用の周知徹底が不十分であった。今後もデータを追加・更新し、さらに利用しやすさと信頼度を高めていきたい。 ○4学年による浪人生への激励会が年2回実施され、また、個別の相談にも4学年主任を中心に丁寧に対応することができた。</p>
教育改革	<p>「チャレンジプロジェクト(+4学年活動等)」の充実を図る。</p>	<p>○「心に火をつけるフォーラム」、「文理・融合講座」、「探究力向上セミナー」、「キャリア探究対話」、「GRITセミナー」、「東大探訪」等の行事を中高異なる学年とともに経験し、生徒自身の在り方や生き方、進路について考えを深める。 ○「知道プロジェクト発表会」をとおして課題発見力を高め、多視点からの論理的考察力や、他者への伝達力、研究態度を培う。「パブリックリーダースクール」等の行事により、将来において社会貢献のできる人間育成を目指す。</p>	A	<p>○「心に火をつけるフォーラム」は、尾身茂氏を講師に選んだことで素晴らしい内容になった。「探究力向上セミナー」の講師から「知道プロジェクト発表会」の講評をもらったり、「キャリア探究対話」では2人の話を聴けるようにしたりと、工夫を凝らした。「パブリックリーダースクール」では近隣の生徒も招待した。 ○「+4学年」の異学年交流をさらに活発にしていきたい。</p>
	<p>教員の授業力向上を図る。</p>	<p>○中高合同の授業改善チームを中心に、授業改善を積極的に進める。 ○「校内授業公開」による校内での実践研修および、「筑波大学附属高校等の教育研究大会」、「駿台教育研究所の教育研究セミナー(含オンライン)」、「Find!アクティブラーナー(オンライン研修)」等による学習指導法研修を行い、質の高い授業を研究する。 ○「校内教員研修会」、「県外進学校視察」等を行い、難関大学進学指導やこれからの時代に求められる教育等に関する知識や技術を蓄積し、継承する。</p>	B	<p>○「校内授業公開」は重点期間を定め、管理職が選ぶ研究授業を案内し、改善を試みた。「校内教員研修会」ではボイストレーニングやICT研修も行った。県外視察は行き先を見直し、人数を増やした。 ○筑波大学附属高校への参加者、「Find!アクティブラーナー」の利用者、授業公開を見学に行く教職員が少ない。多忙な毎日だが、魅力的な研修を企画し、教育力を高めたい。</p>
	<p>開かれた学校づくりを推進する。</p>	<p>○中高連携や、他中学・高校・高大連携を推進し、相互に連携・交流を深める。 ○「学校公開」を行い、本校の教育活動や取り組みを広く周知する。 ○「知道プロジェクト発表会」は、学識経験者等の第三者に見てもらい客観的立場から意見をいただく。他校教員や保護者来場・評価も検討する。</p>	B	<p>○「学校公開」では、ガイドツアー「水戸一の道」と御城印で地域の住民を呼びこむことに成功した。「文理・融合講座」では今年度も多数の教授を迎えた。 ○附属中1期生が高校に入学したので、中高の交流を深めたい。他校生と連携する活動も今後の課題である。</p>
	<p>充実した教育活動により、未来を担う人間を育成する。</p>	<p>○「総合的な探究の時間」をとおして進路意識と探究心を刺激し、将来を考えさせる。 ○学校の教育活動全般をとおして、道徳的判断力や実践意欲・態度を育成する。 ○『課題研究優秀論文集』等を作成し、当該生徒は年間の学習成果の確認、学校全体としては共有化、後年のための資料化などにより教育活動の充実に資する。</p>	B	<p>○学年任せになってしまうことが多かった「総合的な探究の時間」の年間計画や具体的な指導計画を見直し、学校としての方針や方法を整備しつつある。 ○本分掌で作成する報告書について、電子媒体化や発刊時期の柔軟化などが検討事項である。</p>

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
生徒支援	基本的な生活習慣の確立を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 挨拶の励行。日常生活の様々な場面で積極的に挨拶を行うようにする。 ○ 校外・地域等に貢献・奉仕しようとする意識を持たせ、主体的に行動できるようにする。 ○ 規範意識を高め、水戸一高生として誇りの持てる行動ができるようにする。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○ ほとんどの生徒は、高い規範意識を持ち、挨拶などの基本的な生活習慣が確立・定着している。次年度は、校内だけでなく、学校間や学校と地域間などの交流もより充実させ、地域社会に貢献できる生徒を育成していきたい。
	学校生活の安全を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 思いやりのある豊かな人間性を養い、人間関係を円滑にし、水戸一高生としての自覚と責任ある行動が取れるようにする。 ○ 各学年・保健厚生部・養護教諭との連携を密に、アンケートなどを活用しながら、生徒の状況を正確に把握し、心身の安全を支援する。 ○ スマートフォン依存症防止のために、スマートフォン等の適切な使用法を支援する。 ○ インターネット上で個人やグループに対する誹謗中傷や、SNSでのいじめ、仲間はずれ、個人攻撃などが行われないようにする。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全体として「他者を思いやること」、「水戸一高生として自覚のある行動を取ること」ができており、落ち着いた学校生活を送ることができている。 ○ スマホ活用のルール作りを年度当初に全学年で行うことで、SNS上でのトラブルの訴えはなかった。ただ、他校ではSNS絡みのトラブルが大きな問題になっているケースもあり、専門家による講演会を行うなど、スマホの適切な使い方に関する理解を深める場をより充実させる必要がある。 ○ 高校1年生を対象とした薬物乱用防止教室は、各教室でグループワークを行いながら生徒が主体的に学べる形で実施した。活発な議論が行われ、薬物乱用に関して理解を深めることができたと感じている。次年度もさらに良い形を検討し、実践していきたい。
	交通安全の意識を向上させる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自転車は車道の左側通行など、交通法規の遵守を徹底する。 ○ 自転車による交通事故0(ゼロ)を目指す。自転車を運転する際にはヘルメットを着用し、スマホやイヤホンを使用しながら運転をしないなど、安全な自転車の乗り方を徹底する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○ 警察や地域の方々と連携した交通安全のキャンペーンなどを実施することができた。交通事故の件数は昨年7件から1件と減少した。次年度も、引き続き、注意喚起を行うなどして、交通事故0件を目指していきたい。また、自転車乗車時のヘルメットの着用率もまだまだ高いとは言えない状況である。こちらも引き続き、啓発活動などに力を入れ、ヘルメットの着用率を上げていきたい。
	いじめ問題に適切に対応する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ いじめの未然防止に努め、いじめのない学校を目指す。 ○ いじめを早期発見するために、各部署との連携を図り、職員全体で情報を共有する。 ○ 教職員対象に研修を実施するなど、いじめに対する意識を高める。 ○ インターネットの適切な利用を指導することで、SNS上のいじめを防止する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○ いじめ対策会議を毎月行い、情報を共有することでいじめの未然防止や適切な認知・対応につなげることができた。「いじめのアンケート」以外に、「こころとからだのチェックシート」を併用し、生徒の心身の健康を観察し、支援につなげることができた。また、学校が運営、管理するオンライン相談窓口を開設し、いつでも悩みを相談できる体制を作ることができた。今後も、生徒が安心、安全に学校生活を送れるように支援していきたい。
情報	校内ICT環境の改善・整備を適切に行う。	<ul style="list-style-type: none"> ○ GIGAスクール構想・DXハイスクール事業に基づき、適切な教育が進められるようICT機器の更新や整備をおこなう。 ○ 生徒「情報委員会」の活動のあり方について助言をおこない、ICT環境の適切な使用に生徒が積極的に関わられるよう支援をする。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○ DXハイスクール構想事業では、IT企業訪問、壁面スクリーン、階段教室レクチャー機器、ネットアクセスポイント増設、PC環境改善等の対応をおこない、生徒のICT学習環境に資することが出来た。 ○ 生徒情報委員会の活動については特別活動部と協力し支援していく。
	学校情報発信の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒「情報委員会」の活動内容を、適切な情報発信をできるよう支援する。 ○ Webページの改編に情報委員会生徒のアイデアを生かす。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校ホームページの更新は、過年度と比較し頻繁におこない、新しい情報発信に努めた。 ○ Webページがより見やすい形となった。 ○ 著作権・個人情報等の法令遵守の精神をより深く反映させる研究を進める必要がある。
	教育の情報化へ向けた支援活動を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教員が教育の情報化を適切に進められるように、ハードウェア、ソフトウェアの両側面から支援する。 ○ 他分掌、学年との連携を強化し、情報部として可能な支援を引き続き推進する。 ○ 情報セキュリティについて、生徒や教員に対して個人情報の厳重な管理やウイルス対策等について、注意喚起・情報提供をおこなう。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○ 校務用PCの更新をおこない、迅速な校務処理を進められるように改善した。 ○ 情報セキュリティについて、個人情報、マルウェア対策を行った。 ○ ソフトウェア提供会社のOS更新に伴う校内サーバーほか諸サービス・システムへの影響についてセキュリティを確保しつつ対策を引き続き行う。
	効果的な学校評価アンケートを実施する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校評価の質問項目を継続検討し、より学校運営に生かせるような形を目指す。 ○ 保護者からの回収率を上げる方策を実施する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校評価では、基本的な質問項目を残しつつ内容を一部改めた。 ○ 保護者からの個別自由意見について、各分掌・学年とも連携のうえ対応を具体的にを行った。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
図書	生徒の課題発見と探究活動を支援する図書館として一層の充実を目指す。	<ul style="list-style-type: none"> ○図書管理・検索システムのアップデート情報に留意し必要な場合は適用を検討する。 ○教科からの授業内容に関連する推薦図書情報を得て、レファレンス・展示等をおこない、貸出し利用に繋げる。 ○選書について、多様な興味関心をもつ生徒にできるだけ沿う選書をしてゆく。 ○総合的な探究(総合)の時間での利用をはじめ、生徒一人ひとりの学習で一層の図書館利用が進むように館内展示の工夫だけでなく、授業内での支援を推進する 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○新刊図書の配置のために授業利用等が見込まれない資料の整理、除籍を進めていく。 ○各教科の授業や+4学年活動に関わる行事についての展示を各学年のフロアの一角で行った。 ○選書、特に生徒によるものについては蔵書の現状をよく把握させた上で、選書に臨むようにしていきたい。 ○探究活動の時間では「朝日けんさくくん」や論文検索ソールの使用を学年や教育改革部と連携して呼びかけていきたい。
	読書体験の機会を設け意識を高め、読書に親しむ生徒の増加を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○読書会、ビブリオバトル等のイベントを開催し、生徒同士の読書体験の共有・啓発運動を行う。 ○各種読書コンクールへの積極的応募を勧め、校内表彰とあわせて読書への興味をさらに高める。 	A	B <ul style="list-style-type: none"> ○本年度もビブリオバトルを企画し、生徒の読書活動の啓発に努めている。また、中学校委員会との連携が限定的なものに留まっているので、中学校の担当者と打ち合わせの上、連携の内容を高めていきたい。 ○国語科との早期の連携が功を奏し、応募結果が全国コンクールの入賞1名、入選1名、県コンクール入賞1名というものであった。次年度はこの結果を発信してより募集を増やしたい。
	図書委員会が可能な範囲で最大限充実した活動となるよう支援を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ○毎日のカウンター当番等を活動の基盤としながら、学苑祭・イベント運営、機関誌編集などに主体的に取り組める生徒の育成をめざす。 ○イベントの進行や広報にICT機器を積極的に活用する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○今年度から委員会の役割分担をより明確にしたため生徒の活動も昨年度より活発であった。次年度も継続させたい。 ○図書館の新刊図書の連絡等をSNSなどを活用し、発信していきたい。
	機関誌発行で生徒に編集体験を積ませ、年報発行で本校の歩みを記録する。	<ul style="list-style-type: none"> ○図書館報2誌の制作について、中高生徒を編集に参画させ計画的に発行する。 ○年報の発行に向けて、編集方針検討や資料収集作業を着実に進行。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒の主体的な編集を進めることができた。現在は中学と高校の紙面が分かれているので、合同で編集するページなどを次年度は盛り込んでいきたい。 ○年報発行に向けて、引き続き編集作業を続けていく。
保健厚生	学習環境の整備に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○清掃箇所をクラスや部活動等の団体に適切に分担し、校舎内外の美化に努める。教室のワックスがけも併せて行う。 ○新型コロナウイルス感染症が5類に移行したが、教室のゴミ箱を使用させない等の基本的な感染対策は継続して行い、衛生環境が保たれるような取り組みを徹底する。 ○清掃用具やカーテンの劣化や衛生状態、適切な数量・道具がそろっていることの確認と交換・補充、モップ等、清掃用具の点検、交換、補充を行う。 ○教室等の空気・照度検査、飲料水の水质検査、ダニの検査等を実施する。 ○施設・設備の安全点検を行い、学習環境の安全の確保を図る。 ○相談室設置に伴い、部屋の整備・利用調整を行う。 	B	B <ul style="list-style-type: none"> ○今年度9月から各清掃分担区域の安全点検を毎月実施し、スプレッドシートで報告、管理する体制を整えた。引き続き、次年度も、定期点検を欠かさずに行い、校舎内外の安全管理、整備を行っていきたい。また、ゴミ箱はフタ付きで足ペダルで開閉できるタイプの方が感染症対策としては良いので、検討したい。 ○夏の熱中症対策では、WBGTを計測する熱中症計の活用に加えて、噴霧器を購入し、全校野球応援で活用することができた。次年度も、引き続き、熱中症の予防対策を徹底していきたい。 ○次年度も、各衛生検査を継続すると共に、教室におけるCO2濃度の測定やサーキュレーターを活用した換気を徹底し、コロナやインフルエンザなどの感染症対策を行っていきたい。
	心身ともに健康的な生活習慣の確立に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○事故等の未然防止のために、担任や養護教諭等を中心とした保健指導を、適宜行う。 ○各学年、生徒支援部、スクールカウンセラー等と連携し、生徒の心身の健全な育成に努める。 ○健康に関する情報提供のための「保健だより」を、毎月1回発行する。 ○災害時における避難訓練を防災に対する意識を高めるよう指導する。また、休日や校外においても緊急事態に対応できるよう意識付けを図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○スクールカウンセリングの希望者が増加しており、実施回数を確保することと同時に、カウンセリング前に予備面談を行うなどして、緊急性の判断や、支援の程度を見極めていく必要がある。 ○次年度も、全生徒、全職員に、避難経路の周知、徹底をする。今年度は、不審者対策と火災対策を想定し、避難訓練を2回実施することができた。次年度も本校で起こりうる災害を想定し、より実践的な訓練となるように計画、実施したい。 ○災害時の備蓄品の整理と、必要数の確保を引き続き行っていく。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
1 学年	基本的な生活習慣の確立を図る	<ul style="list-style-type: none"> ○挨拶を中心とした、誠実な態度を身につけさせる。 ○自主的な時間管理を意識させ、時間の大切さを再認識させるとともに、時間厳守を心掛けさせる。 ○規範意識を醸成し、高めさせる。 ○環境整備・清掃活動の活性化を促す。 	B	B	○挨拶、時間管理、規範意識、清掃活動等大部分の生徒が十分に意識して生活を送っている姿が見られる。しかし、一部の生徒については毎朝教室に駆け込む姿がみられなど、今後も継続して指導していく必要がある。
	基礎基本を徹底し、自主自律的学習習慣の養成を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○予習、授業、復習の学習サイクルを徹底させる。また、家庭学習時間を確保させる。 ○生徒の知的好奇心を大切に、適切な進路情報を提供することで、進路希望・適性に沿った文理選択を促す。 	B		○学習に向かう姿勢については、意欲的に取り組んでいる生徒が多くみられる一方、後ろ向きになっている生徒も一定数みられる状況である。多くの生徒が積極的に取り組める学習課題の提示や指導を続けていきたい。
	特別活動への積極的参加を促し、互いに高め合いながら主体的に行動できる集団の育成を図る	<ul style="list-style-type: none"> ○部活動や委員会、学校行事やボランティア活動への参加を通して、他者との自発的な交流を図る。周囲への敬意や感謝の気持ちをもって生活できるようにしていく。 ○内進生と高入生の積極的な交流の場を設け、互いに認め、共に助け合い、高めあう集団の形成を目指す。 	A		○内進生と高入生は、さまざまな行事や部活動を通して自然と交流を深めており、クラスだけでなく、学年として良い集団が形成されつつある。生徒の自主的な活動を見守りつつ、より高いレベルでの集団形成を図っていきたい。
2 学年	基本的な生活習慣の確立、学習活動と部活動・委員会との両立を図る。規範意識と自主自律の精神の高揚を図り、リーダーとしての資質を涵養する。	<ul style="list-style-type: none"> ○日常の挨拶を定着させるとともに、5分前行動など、時間の管理を徹底させる。 ○規範意識を高め、場に応じた行動をとれるようにする。環境整備・清掃活動の活性化を促す。 ○SNSやICT機器との向き合い方を身につけさせる。 ○学校行事や部活動・委員会活動を通して、学校の中核を担うという意識を育てる。 ○周囲に配慮しつつ、自分の置かれた立場だからこそできることを実践させる。 	B	B	○遅刻・欠席者が少なく、比較的落ち着いた学校生活を過ごすことができた。支援を要する生徒については、学年団で情報を共有して、関係職員やスクールカウンセラーと連携をとりながら対処を続けている。 ○様々な活動に取り組む姿勢から、学校の中核を担うという自覚が少しずつ感じられるようになった。他者への敬意を忘れず、独善的にならないよう呼びかけながら、見守っていきたい。
	基礎基本を徹底し、確固たる学力の土台をつくる。将来の進路に対する意識を高め、目標を定め、実現するためのプラン作りを促す。	<ul style="list-style-type: none"> ○学校の授業を中心に、「予習」「授業」「復習」のサイクルを確立させる。 ○授業公開や情報交換を積極的に行い、授業の質を高めていくなかで、生徒の学習意欲の向上につなげる。 ○生徒の知的好奇心を涵養するとともに、学校内外のワークショップへの積極的参加を奨励する。 ○適切な進路情報を提供することで、進路希望・適性に沿った進路選択を促す。 	B		○学習意欲を高めるため、学年集会や進路講演会、進路に関するワークシートなど、進路情報を定期的に提供した。 ○ラーケーションを活用する生徒が多くなり、オープンキャンパスをはじめ、さまざまなワークショップに参加している。 ○生徒が自ら考え、自ら学ぶ姿勢を身につけられるよう支援を継続したい。
	自己理解を深め、自分自身を大切にすることが育てる。他者との交流のなかで、一人ひとりが高め合える集団をめざす。	<ul style="list-style-type: none"> ○部活動や委員会、学校行事やボランティア活動への参加を通して、他者との自発的な交流を図る。 ○周囲への敬意や感謝の気持ちをもって生活できるようにしていく。 ○自分の置かれた立場で、小さな課題を解決していくことで、自己有用感を獲得させる。 	B		○生徒会をはじめ、委員会活動に積極的に取り組んでいる。様々な価値観をもつ他者と交流を重ねるなかで、広い視野や周囲への敬意を身につけてほしい。 ○次年度の学校生活においては、限られた時間の中で、いかに成果を大きくするかを考えて、活動することを求めたい。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
3 学 年	<p>高校生活を送る上での基本的な生活習慣を確立する。 規範意識を醸成する。 平等で公平な支援を行う。</p>	<p>○時間厳守(提出期限・集合時間・登校時間)と挨拶を励行する。 ○いじめにつながる場面や可能性を速やかにとらえ、その状況を放置しない。学校行事を含めた様々な場面におけるSNS・情報機器の適切な扱いを促す。 ○教室の環境整備・学校の清掃を徹底し、学習しやすい環境を作る。 ○SHRでの均一的で統一的な指示・連絡をする。学年会を行い、必要な伝達事項と業務を点検する。</p>	A	<p>○生徒たちは最高学年としての自覚を持ち、+4学年のパートナーである中学1年生に対しても、温かく、模範となる学校生活を送ることができた。また、挨拶・コミュニケーションをしっかりと交わせる生徒も多い。 ○担任は1時間目の前にも教室に行き、生徒の心の安定を最も大切にし、生徒の変化にいち早く気づき、面談などを行った。また、生徒が安心して相談できる関係づくりを築いた。 ○SNS・情報機器の使用を巡るトラブルは無く、早い時期からスマホとの向き合い方を自分事して捉え、生徒が自ら考えて適切な管理ができるように促した。 ○クラス担任間でのコミュニケーションを密に取り、互いに協調し合いながら各HRでの均一的で統一的な指示・連絡が行えた。特に進路関係の連絡などは、漏れなく公平に行うことができた。 ○生徒が互いに高め合える教室の整備に関しては今後も継続していきたい。</p>
	<p>高い進路目標を掲げ、その実現に向けて妥協のない自己修練を促す。難関大学(東大・京大・阪大・東北大・名大・東京科学大・一橋大)や医学部医学科をはじめ、生徒の第一志望実現を支援する。 低成績層への支援と声掛けを行う。 授業力の向上を図る。 観点別評価の研究と実践に努める。 医学部・共テ「情報」、総合型選抜、学校推薦型選抜動向の研究と生徒・保護者への情報提供を行う。</p>	<p>○進路情報を精査し、高い進路目標を設定するための指導・支援を行う。 ○授業を中心とした主体的かつ計画的な学習を促進する。 ○「教養」「抽象的思考力」を意識下に教授内容を研究・計画する。 ○生徒の学習状況・成績状況をスタッフ間で共有し、声掛けの材料を不断に仕入れる。 ○過去問演習の促進、教科間連動の教材研究に努める。 ○考査作問(教授内容)と評価との明示的なつながりを持つ。</p>	A	<p>○模擬試験結果を担当だけでなく、教科担当者とも共有し、生徒一人一人が抱えている課題を学年団で共有し、適切なサポートを行った。特に、早期から学習面で悩んでいる生徒に対して、担任が一人で抱え込まず複数の教員で様々な視点から支援を行った。 ○模擬試験結果について、分析会を行ったり、志望校検討会を行ったりして、学年全体で生徒一人一人の進路情報を共有し、生徒の進路実現に向けて検討を重ねた。 ○新教育課程・観点別評価の下、指導と評価の一体化に関する研究と情報交換を行った。引き続き、授業担当者と生徒がともに納得するような評価の在り方を探していきたい。 ○「学年通信」計19回、保護者連絡網(週1回で計35回)を実施した。また、夏季・秋季保護者面談では、十分な時間を取り、担任が保護者に寄り添うような面談を行った。今後も、開かれた学校、学校教育活動の「見える化」を進めていきたい。</p>
	<p>コミュニケーション力の養成を行う。 特色選抜入学生への支援を行う。</p>	<p>○「出番(学校行事・部活動・委員会活動)」の機会を増やし、生徒の自己肯定感を上げる支援をする。 ○部活動顧問との情報共有、学習状況の継続的調査(及び学習支援)、校内外行事でリーダー的役割を担える環境を醸成。</p>	A	<p>○各種学校行事で、生徒実行委員が中心となった活動ができるように支援を行い、生徒の自主的な活動を見守った。学苑祭や歩く会では後輩にその伝統を引き継ぐとともに、リーダーシップを発揮するなど、出番を増やすことができた。 ○部活動においても充実した活動が最後までできるように、やり切ったという思いを持てるように支援した。 ○本校の伝統と行事の在り方を研究し、生徒のより良い活動の在り方について、今後も検討をしていく。</p>

※評価基準 A:十分達成できている B:達成できている C:概ね達成できている D:不十分である E:できていない